OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	合評会配付資料
Author(s)	
Citation	臨床哲学. 2012, 14(1), p. 80-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24258
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

配布資料 1

中岡成文『試練と成熟――自己変容の哲学――』書評会資料

村上靖彦（人間科学研究科）

1. 本書の書かれ方

● サイケデリックに多様な例

第 1 章 (pp. 24-56) に登場する例を並べてみると…

君子豹変、無事これ名馬、スポーツ選手の鍛錬、ドイツの小学校に通う先生のお子さん、アリストテレスの不動の一者と変化、目的論、がんの化学療法、下半身麻痺のリハビリ、中岡先生自身の老い、伊勢物語、カフカの『変身』、中岡先生のお父さんの看取り、がんで死んだ同僚の子ども、父との関係、ある映画監督の注文の受注、レヴィナス、友達を傷つけた経験、傷病兵、障害者、他者としてのパソコン、他者としての自分の容姿、離人症、ドッペルゲンガー、デリダ＆サール論争、ニュッサのグレゴリオス、木っ端仏、ニーチェの「生成の無垢」

本書は、「具体例から思考する」という主張 (13-14) とは逆に、おそらく非常に抽象的に構想されている。かつ、事例の連想は、(具体的だが) 著者の個人的な連想の動きによるので読者にはロジックが見えにくい。この高度な抽象性と、具体的かつ私秘的な連想との両立が構成の仕組み。

：なので事例に沈潜するのではなく、少し距離を置いて眺めたほうがよくわかる：複雑性の縮減 (180-181)

● 本書の作られ方：経験 ==> 抽象 ==> 事例

1）経験をたたき台にいったん消化した上で、非常に抽象的なシェーマを作成

2）このシェーマに当てはまる事例を（私秘的な連想に従って）探し出す。

(pp. 11-12 で「出来合いの哲学」を持ち込むか、現場から「ボトムアップ」するかという、方法の問いが問われている。本書は忠実にこの両者のバランスを取ろうとしているが、具体と抽象の振幅が非常に大きい。)

● **ヘーゲルというモデル**

「『精神現象学』の圧倒的な豊かさと多様性を統御するのは、一方においては精神が「絶対知」にまで発展するという、今となっては疑わしいロゴス中心主義的御構造化であるが、他方においてその構造さえ自ら掘り崩していく活き活きとして強靭な現実感覚でもある。」(5)

：本書は同じ作り方をしているように見える。

● **事例 case と例 example**

一見すると、事例の多くは「いくつか例をあげてみよう」(24) という「例 examples」であり、「ケース」という言葉は使われるものの（例えば 161）、分析の対象としての「事例 cases」ではないようにもみえる。

しかしこれは見せかけである。

「私は、「何でもいいんですけど……」という前置きで語られる、凡百の実例からたまたま拾い出された実例を「事例」とは認めていない。事例は主体が任意に切り取る（能動）ものではなく、むしろ事例が私を選ぶ（私は受動）とさえ考えている。もっと慎重な表現に頼れば、私にとって特権的と感じられる仕方で私は事例に出会い、長年かけてそれを「持ちこたえ」、そのさまざまな意味合いのひだを少しずつ悟りつつ、それが他ならぬ私の事例であることを実証するのだ。」(158)

：ここでの「事例」は case の方である。事例が「長年かけてそれを「もちこたえ」」ることで、抽象化され、本書執筆のときには事例自体も抽象化され要約されてエッセンスだけ提示されるので例 example のような見せかけを取る。

つまり事例をダイレクトに分析して提示するというのとは異なる仕方で抽象されて思考されている。

● **宮沢賢治『セロ弾きゴーシュ』の分析 (120-122)。**

本書は長文の引用をしていない…

ゴーシュは思わず足を上げて窓をばっとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して砕け窓

はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとなった窓のあとをかっこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなってしまいました。ゴーシュはしばらく呆れたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室のすみへころがって睡ってしまいました。

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯のんでいますと、また扉をこつこつ叩くものがあります。

〔…〕ゴーシュはその〔狸の子の〕顔を見て思わず吹き出そうとしましたが、まだ無理に恐い顔をして、〔…〕。（宮沢賢治『セロ弾きゴーシュ』青空文庫から）

・なぜゴーシュは水を飲んでから練習を始めるのか。なぜねずみのときは飲まないのか。そしてなぜ最後の場面で水を飲むのか。

→　練習し終わると「眠る」。眠りとは？水を飲むこととの関係は？

・なぜゴーシュではなく猫とかっこうが壁やガラスにぶつかるのか？

→　境界線の問題が強調される。

◇　猫を閉じ込めようと部屋の鍵を締め。かっこうを逃がすときに窓が壊れ、

◇　チェロの胴のなかにねずみが入る。

●　３つの例は異なる空間構成、境界の構成

・だんだん笑いが大きくなる：笑いと主体変容の関係

・「こらえ切れ」ない、「切ない」とは？

→　ねずみの母親はなぜ「こらえ切れなく」なる？

→　最後の場面で猫が「切ない」というのは？（猫に練習を聴かせる場面ではこの言葉は使われない）

◇　動物たちはゴーシュにおける「何か」ががまんできない。（自己の底の「もの」？）

・ゴーシュは動物との出会いを通して自分が下手だと気づいていくとともに、最後に、下手なチェロが動物たちにとって治癒的な効果を持っていたことを知らされる（ゴーシュが変容する前から治癒的だったのであり、かつ動物も治癒という形で変容する）。この両義性は何を意味するのか。

・ディテール、ノイズのなかに構造は隠れている。

（ミニマムな水準の分析を通して、個人の心理を超えた水準の大きな流れが見える）

2. 境界論として

● **本書の構成**

→ 核となる装置：二項対立をいったん立てて、その境界を動揺させる：モノ・人、個人・社会（ヘーゲルの正反合に代わる本書の装置）

→ 価値付け（よいわるい、目的、偶然と必然、などの）相対化（第１章）

→ 何が変容？（第２章）＝＝＞自己と X との関係が変容

◇ 人間関係（個別）

◇ 社会制度との関係

◇ 自然（もの）との関係

◇ 自己との関係（個別・人）

◇ 意味との関係（前の４つの関係の総合？）

意味関係性とは？（人間関係も、社会との関係、自然との関係、自己との関係はすべて言語を媒介とするのだから、すべて意味との関係でもある？）

関係こそが変化する＝＞１）境界の問題が重要、２）自己言及的に自己が定義される

変容主体論の５つの関係が、どのような「構造で」組み合わさるのか？

→ どう変容？（第３章）

- 境界をまたぐ２項（鏡像）間の緊張（児童虐待）
- 規範が自己組織化するなかで規範自身が動揺（パラダイム論）
- 境界線そのものの気持ち悪さ、動揺（クリステヴァ）
- 無関係な外部との応答（バルト）

→ 何が変容させる？（第４章）

◇ （中動相）――

1) 相互に影響するという意味。能動するものが被ること。主客反転。

==> これも境界の問題

2) 非人称的な主語（第６章の「触媒」に対応？）

→ 外部の側が前景に立って、自己が消える？

3)「自動詞」の「目的語」としての「もの」(154-155)

→　自己の底の「もの」と関わりながら「変容する」

◇　２と３は対になる？

●　これら３つの中動相のあいだの関係は？

→　変容と言葉（第５章）？？

◇　世界（変容）は言語で分節されている

◇　人間が言語を使って規定する

→　変容と援助（第６章）

◇　掌握、演技、脱掌握（当事者の視点）

●　現実（社会・もの）との関係で行為主体をどのように組み立てるか

◇　良い顧慮と悪い顧慮（援助者の視点）

●　相互性、触媒（第４章の「中動相」の議論を受ける？）

◇　老いと弱さと折り合いをつける。（第４章の自己の底の「もの」？）

●　自分自身の変化のなかでいかにして主体であるか。

3. 質問

・現場とは何か。事例とは何か。

・「もの」とは何か。

→　シェリングの自然（初期ハーバーマス）？、

→　自己の底の自然？老い？

・境界とは。

→　境界のゆらぎ

→　境界を挟む二項の間の緊張、相互影響、反転

→　主体の消失（境界も消失？）

→　主体のなかの外部としての「老い」という「もの」（境界線の位置変更？）

・ドイツ観念論は「臨床哲学」のなかでどのように生かされるのか。

配布資料２

第２９回臨床哲学研究会「試練と成熟－自己変容の哲学」合評会

2012.7.8

臨床哲学博士前期課程

文元基宝

１．はじめに（読者との相互作用）

本書は読者としての相互作用を期待しており、著者自身も「書きながら」自己変容を実践している。「自己変容の哲学」は臨床哲学運動と連動しているからである。中岡先生は臨床哲学運動を展開していくなかで、さまざまなフィールドを経験し、多くの人と出会った。この運動が先生を「自己変容の哲学」に向かわせた。書斎でひっそりと営まれる哲学からの転回。換言すると、「私と他者（世界）」が関係する「日常」へと哲学を転回し、そして実践しつづけている。

「自己変容の哲学」は、中岡先生にとって、「生きることそのもの」、「考えることそのもの」、「書くことそのもの」である。

本書はその実践である。だから著者は、読者との相互作用を期待している。両者の変容が生じることを期待している。

私は著者のその期待に応答したい。私の変容を発表することで、本書を批評する。

２．批評する私の観点

ⅰ）臨床哲学金曜６限授業「安楽班」に参加。歯科医療の思想に疑問（医師患者関係につながる）。

↓　↑

ⅱ）西川さん（大阪大学コミュニケーションデザインセンター）との付き合い（医療ミーティング等）。

↓　↑

ⅲ）臨床哲学大学院在籍　「自己変容の哲学（授業）」受講。「ヘーゲル哲学と臨床哲学」読書会。

↓　↑

ⅳ）臨床哲学合評会「自己変容の哲学（臨床哲学）」

3．苦痛

ⅰ）文献研究（論文作成演習）

ⅱ）中之島哲学コレージュ「人が病み、治るとはどういうことか―ホメオパシーによる生命観」

- 専門知の閉鎖性
- 哲学への幻想
- 非専門者への態度

4．今後考え、実践すること

ⅰ）臨床哲学の現場、媒介する知

ⅱ）対話

配布資料 3

田中俊英（NPO 法人淡路プラッツ 代表）

ひきこもり・ニート / スモールステップスケール ver.2.0（©2012 NPO 法人 淡路プラッツ）						
支援のステップ	**本人のステップ**		**スモールステップの指標**			
	状態	スモールステップのタイプ	家族	外出	支援施設 / キーパーソン	就労 / 就学
A. アウトリーチ支援	1. ひきこもり	① 親子間断絶	–	–	–	–
		② 外出不可	○	–	–	–
		③ 外出可	○	○	–	–
B. 生活支援	2. ニート	④ a 心理面談 / コミュニケーション	○	○	★	–
		④ b 心理面談 / 生活訓練	○	○	○	–
		④ c 心理面談 / レクリェーション	○	○	○	–
C. 就労支援		⑤ 就労面談タイプ	○	○	○	–
		⑥ 短期就労実習タイプ	○	○	○	△
		⑦ 長期就労実習タイプ	○	○	○	△
		⑧ 短期アルバイト	○	○	○	○
		⑨ 長期アルバイト	○	○	○	◎–
		⑩ 正社員	○	○	○	◎